

## 借金から見えた 家族を思う夫の心。

弘前教会 岩根良予さん

平成12年、岩根良予さんの夫の会社が倒産。借金返済のため、毎日の食事に困るほどの生活苦に陥った。夫は三人の子どもと一緒に地元に残まることを選択し、懸命に働いていたが、岩根さんは、「借金を背負った夫のせい。知り合いのいない土地で新たな生活をしたい」と悶々としていた。そんな苦しい日々が続いていたとき、仏教の教えを共に学ぶ仲間から、「いまの状況は、家族が一つになるための仏さまからのほからいです」と諭される。それから岩根さんは、夫へ励ましの言葉をかけるよう努めた。夫は最初黙っていたが、しばらくするとお互いに労いの言葉を交わすようになり、「苦」を感じなくなっていた。平成17年、社会人となった長女から、「あの頃はどん底だったけど、両親がそばで護ってくれたから不幸だと思わなかった」と言われ、夫の選択が正しかったのだと得心した。岩根さんは、「借金という苦を乗り越え、家族は一つになりました。その意味で、借金は私にとって功德だと思えます」と語る。



## 「違い」があるからこそ

私たちは一人ひとり異なる因と縁によって生まれてきています。また生まれてからも、一人ひとりがそれぞれ独自の縁にはぐくまれて、「私」という個性があります。ですから、人種や容姿はもとより、人と考え方やものの見方が違うのは当然で、違いを理由に対立したり、排除したりするのは、自分の個性を否定することと同じです。

宗教の世界においても、人それぞれの縁に随したがって救われる道が異なるのは自然なことで、キリスト教の教えで救われる人もいれば、イスラム教や仏教の教えで救われる人もいます。それは、安らぎを求める人が、信じ仰あおぐ教えがたくさんあるということです。この地球に生きるすべての人に安心を与えるため、宗教・宗派のそれぞれが個性を発揮しつつ、お互いに補おたぎいあっているともいえます。

宗教をそのように見ると、人を安心に導くという慈愛じあいの一点において、宗教は二つに結ばれていることがわかります。そして、宗教によるその慈愛のはたらきかけによって、私たち自身も、心の底に具そなわる「他を愛あいおしみ、慈いしむ心」を掘り起こされ、それを実践せずにはいられなくなる——仏教でいえば、それが菩薩ぼさつの生き方です。